

## 行動空間の馴れについて\*

東北大学教育学部発達心理学教室

宮川 知 彰\*\*

### 1. 問 題

初めて先輩や先生の宅を訪問してその書齋に招じ入れられ、そこで暫く待たされる時、我々はどうのように感じ、どのように行動するだろうか。好奇的に、或は物珍しげにあたりを見廻すだろうし、なんとなく緊張し落着かないだろう。併し、同じ宅を何度か訪問し、往来している中に、我々は自然とその訪問先の雰囲気になれ、驚かなくなっていく場合がある。アットホームな気持、ファミリアーな気持、そういったものが生れてくる。勝手がわかつてくるのである。そして、このようなゆとりの気持の最大なものは文字通り、わが家や、長年のわが職場において得られるのである。ではどのようにして、このゆとり、ファミリアーな気持、空間の馴れは生じてくるのだろうか。

このようなことを、今更、問題として提出することは馬鹿げたことのように思われるかもしれない。鼠の迷路学習に関する数々の実験の如きは、既に端的にこの問題に解答を与えているのだと云つて云えないことはない。が然し、それは飽く迄鼠の場合である。人間の場合、一つの不馴れな空間が馴れた空間に転化していく現象は、それ自体、人間の問題として取扱われるべき一つの問題である。複雑であろう、併し複雑なりにその姿を科学的に解明しえないものだろうか。

三隅の実験(3)は、知覚の側面からするこの問題の解明の一つであろう。そこでは、一定空間に馴れているか否かが、そこにおける大きさの恒常を規定する一つの要因でありそうなことがうかがえる。併し、かかる知覚現象と表裏一体をなす行動の側面からは、どのようなこと

が見出されるだろうか。〔知覚は決して単独にあるものではない。常にその時の行動と同一層に発展することが考えられる(5)。〕

所で、ファミリアリティとかファミリアーといった語を使用する態度は、「不安」や「適応」に関する一二の考察の中に見出されないことはない。\*シャーレイ(4)は、子供(2才-7才)が診療所に6ヶ月おきに何回か連れてゆかれる場合、その診療の日一日間の子供の行動を5つの観点(家を出る時及び診療所に着いた時の行動、朝の遊び時間の行動、食事の時の行動、午后の遊び、及びその日一日の大体の様子)から評価して、不馴事態に対する子供の適応を考察しようとした。そこで彼女が得た結論の一つは、適応状態は結局ファミリアリティの増大とは無関係で、一定であるということであつた(このような結論が出てきた原因は、彼女の実験手続や評価の仕方によるのだが、詳しい叙述は省略する)。然し、ここで注意を要することは、彼女の、ファミリアリティという語の意味である。彼女はファミリアリティという語をば、単に、子供が診療所でいろいろと診察されることを「知る」といつた程度の意味で使用しているのだ。それは凡そ、私がファミリアーな気持という所のものからはかけ離れた意味なのである。

又、アーシアン(1)は、子供(1才-2才6ヶ月)を、馴れない部屋に5分間入れておくことを、隔日に10回ばかりくり返して、子供の不馴事態における行動がどのようなものであり、且つ部屋に入れられる回数と共にならぬ行動の形態が如何に変化するかを観察した(尤も、ここに述べるものは、彼が行つた実験の一部である)。彼によれば、その実験室の条件下では、年少の子供にとつては恐怖事態が成立するのだから、そこで生ずる子供の行動形態は、多かれ少かれ、何らかの程度不安・安心を代表するものであるわけだ。従つて、この実験の結果としては、子供の入室回数の進行に伴う不安・安

\* 本研究は昭和 24, 25, 26 年度科学研究費による。猶本研究の梗概は既に千輪先生還暦記念論文集に発表したが、不充分且つ粗雑であつた。幾分なりともここで訂正出来れば幸いである。

On the Familiality of Behavioral Space

\*\*By Miyakawa, Tomoaki (Tohoku University)

\* 鼠を用いた実験(2), (6)の中にもみられる。

心の度合の変化がえられることになる。それによると、不安・安心の度合は、子供の入室回数（在室延時間）の一次函数ではない。不安は、寧ろ、アンファミリアリテイの函数なのである。もつと正確に云えば、

$$\text{不安} = f \frac{\text{環境のアンファミリアリテイ}}{\text{人の力}}$$

なのである。所でこの場合、人の力というのは、子供が持つ自分の力の感じの度合という意味だが、ファミリアリテイとか、アンファミリアリテイは、一体、如何なる意味で使われているだろうか。アーシニアンは、これらの言葉を、場面の構造化・非構造化という意味で使用する。ファミリアリテイ即ち構造化であり、アンファミリアリテイ即ち非構造化なのである。先にシャーレイは、ファミリアリテイを「知る」という意味で使っていると云った。アーシニアンは一歩進んで、レヴィン流に、これを場面の構造化という意味で理解したのである。従つて、アーシニアンのファミリアリテイという概念は機能概念と云うべきである。

所で、私の云う行動空間のなれ——ファミリアリテイ——とは、馴れた感じのことである。それは飽く迄、現象的体験の事実である。否、馴れた感じということさえも妥当でないような、それ程ファミリアーな、一切の適応的と呼ばれるような行動にそのグルントを提供するような、そういう雰囲気のことである。しかし、私が不馴れた感じ——アンファミリアリテイ——とよぶ所ものは、不安といつた程のものではない。不安においてはマイナスの逃避的行動が現れ易い、不馴れた感じはむしろプラスの探索的行動を招来する可能性が大であろう。しかしこれは、アーシニアンの公式も示すように、自分の力の感じの弱い年少の子供によつてよりも、大きくなった子供達によつて初めて得られそうな、そういう雰囲気であろう。不安と不馴れは確に連つている。然し同一のものではない。我々はこのような観点から、空間の馴れ——不馴れの、行動的対件を実験的に求めてゆこう。

### 2. 実験場所

実験場所は、福井大学心理学研究室第II実験室(図1)及び旧福井工専文科教官室(臨時的に実験室とした)(図2)。各実験場所は夫々図に示す如くに、その内部には事物が配置してある。以下敘述する各実験は、昭和25年9月より27年4月にかけて、上記の二実験室のいづれかにおいて行われたものである。

### 3. 空間の馴れ成立の一般的型

まず、一定空間に対して馴れるとは、行動的には如何

Fig 1

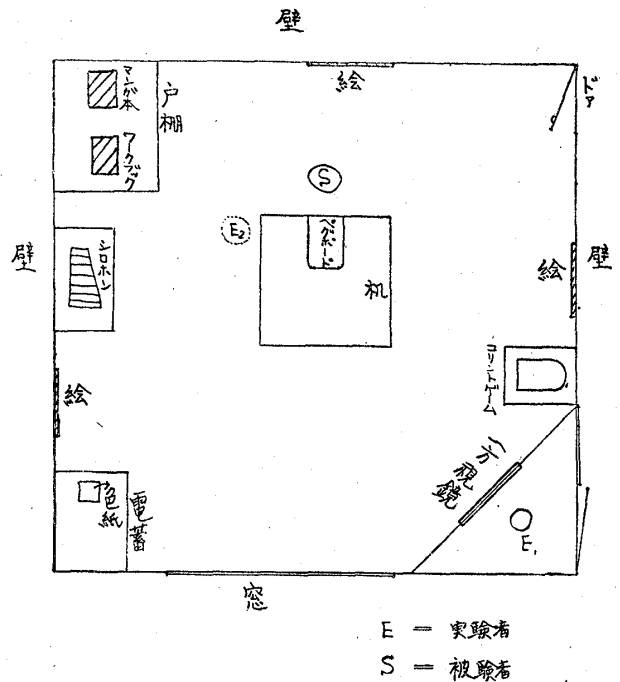
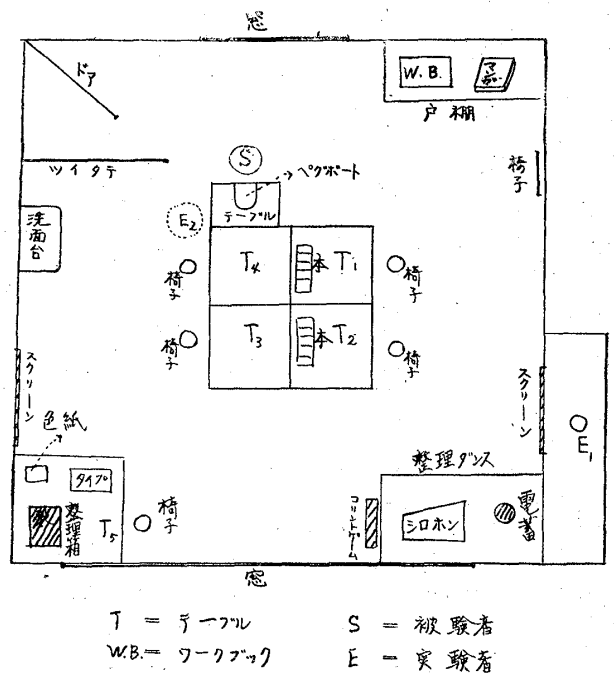


Fig 2



に表現されるかをみてみよう。

実験 I<sub>a</sub>. 実験室は図2のもの。

Sは福井市春山小学校3年生6名。田中B式によつて知能上と認められるもの1名、中3名、下2名。次のような手続で行う。

E<sub>2</sub> は、S 1 名を実験室内に導き、ペグボード (P) の前に坐らせておいてから、「一寸まつてね」と云い残して室外に去る。3 分間 S をそのまま放置しておく。E<sub>1</sub> はこの 3 分間放置の間の S の行動を竹のスクリーンもしくは一方視鏡の背後 (竹のスクリーン——すだれ——を用いたのは初秋の頃で、この室が両隣の室と通ずるドアの所に垂らしておいても不自然ではなかつた) から観察記述する。3 分の放置の後、E<sub>2</sub> は再び部屋に入ってきて、S に P を用いて労働省編適性検査の M 部と呼ばれる手先の作業をやらせる。この作業が終れば直ちに帰宅させる。この手先の作業は、あらかじめ小学校で S 達を担任している先生によく教えておいて貰い、ついで大学の研究室でこの検査を何日かにわたつてくり返し行うことを S とする生徒達に通じておいて貰う。従つて S 達が、実験室に入れられ、P の前に坐らせられる時は、大半の事情 (手先の作業をやらせられるのだということ) を呑みこんでいる。この S 達を実験室に招いた回数は、1950 年 9 月 19 日から 12 月 12 日にかけて 7 回である。S 達を実験室に招いた日相互の間隔は一定ではなかつた。尚、以下述べるすべての実験において、精密な種々の測定器械を整備することが出来ない事情におかれていたこと、及び子供の行動観察に熟練した他の協力者がなかつたことを、お断りしておく。得られた記録は S が

3 分間に、実験室内の事物 (S 自身——自己——を含む) のいずれに、幾回、比較的持続的に眼を向けたり、接近したり、或は手で触れたりしたかの記録である。3 分の間に、視線をむけたり、接近したり、手で触れたりする方向 (対象) の延総数を延行動数とし (ぐるりと見廻す方向性の明瞭でないものは、部屋全体にむけられた一方向の行動として取り扱われた。又、部屋の中に関心を示さず、自分の身体を見たり、思いに耽つたりする行動なども、自己に向けられた一方向の行動として取り扱われた)、この延行動数を行動方向 (対象) 別に整頓すれば、実験室で生じた行動が凡そどれだけの方向対象にむかつて生じたかを示す行動方向数をうる。各方向の行動の持続時間は、精密には測定しえなかつた。猶、対象に視線のみをむける行動を消極行動、対象に接近したり、手で触れたりする行動を積極行動とよぶことにする。

結果を表 I<sub>a</sub> に示す S 達が実験室へ最初におとづれた日は、3 分間にする行動数は多く、且つ又方向数も多いが、3 回目頃からいづれも有意義に減少する (ということは同時に、3 回目以後は、1 つの方向への行動の持続時間が長くなることを意味することを理解していただきたい)。積極行動の方向数については、個性が多くて明瞭なことは云えない。

Table 1<sub>a</sub>

来訪回数 S	延 行 動 数							行 動 方 向 数							積 極 行 動 方 向 数						
	I	II	III	IV	V	VI	VII	I	II	III	IV	V	VI	VII	I	II	III	IV	V	VI	VII
I (♂上)	8	3	2	2	4	2	1	4	2	2	2	3	2	1	2	2	2	1	2	1	1
II (♀中)	3	3	3	3	3	3	4	2	3	3	2	3	3	2	0	1	1	1	1	1	2
III (♂中)	8	8	1	2	2	3	1	4	5	1	2	2	3	1	2	5	0	1	0	2	1
IV (♂中)	5	3	3	2	2	4	3	4	3	3	2	2	4	3	0	0	0	0	1	2	1
V (♀下)	9	8	2	2	2	1	1	7	4	2	2	2	1	1	0	0	0	0	1	0	1
VI (♂下)	8	3	2	2	3	1	3	6	3	2	2	2	1	2	0	0	0	2	0	0	1

(I. Q. の高い者において、早くから積極行動が起るかの如き観を与えるかもしれないが、必ずしもはつきりそう云いきることは出来ない。又、表中積極行動の方向が 1 である場合は、その 9 例までが、P による M 作業の練習を指している。P への積極行動は、他の対象への積極行動よりは生起し易くなつていて、全積極行動の中の約 1/2 をしめるのは止むを得ない。)

さて、この実験においては、3 分間 S を単独のまま放置したのだが、部屋の中に E<sub>2</sub> も共に入つていて放置し

ておく時はどうであろうか。

実験 I<sub>b</sub>. E<sub>2</sub> が S を実験室に入れて、P の前に坐らせてから E<sub>2</sub> 自らも S の近くに腰を下し、3 分の間何かいそがしげに仕事をしているように見せかける。以上の他は、実験条件、手続は実験 I<sub>a</sub> に同じ。実験室は図 2 のもの。S は春山小学校 3 年生 6 名 (知能程度上のもの 2 名、中 3 名、下 1 名)。S を実験室に招いた回数は、1950 年 9 月 15 日より 11 月 11 日にかけて 8 回。結果は表 I<sub>b</sub> に示す。前記 3 年生の場合と同様にグループ編成)。

実験 I<sub>a</sub> と同じ結果がえられた。但し積極行動は激減しており、生じた場合も P に対するものが絶対多数である( $\frac{6}{7}$ )。

実験 I<sub>c</sub>. 実験室の中に S を 3 人乃至 4 人の小集団にして入れ、3 分間放置しておくことにする。他は実験 I<sub>a</sub> の手続と同じである。勿論 3 分間の放置後は M 作業を 1

人ずつやらせる。S は福井県神明町神明小学校の 3 年生 8 名 (1951 年 12 月 12 日より 21 日にかけて 6 回実験室に招いた。4 名ずつの A, B 二つのグループに分けた。A グループは知能程度上と中各 2 名ずつ, B グループは, 中と下各 2 名ずつ) 及び 2 年生 8 名 (1952 年 1 月 16 日より 1 月 25 日にかけて 6 回来訪。前記 3 年生の場

Table I<sub>b</sub>

来訪回数 S	延 行 動 数								行 動 方 向 数								積 極 行 動 方 向 数							
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
I (♂上)	6	5	1	2	2	2	3	1	6	5	1	2	2	2	3	1	0	1	1	0	1	0	1	0
II (♂上)	4	1	1	1	1	2	1	×	4	1	1	1	1	2	1	×	0	0	0	0	0	0	1	×
III (♂中)	8	5	2	1	2	1	1	1	6	5	2	1	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
IV (♀中)	7	4	3	1	2	1	3	1	4	4	3	1	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
V (♂中)	3	6	1	1	1	2	3	1	3	5	1	1	1	2	3	1	0	1	0	0	1	0	1	0
VI (♂下)	8	7	6	4	3	2	1	1	6	5	5	4	3	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0

合と同様にグループ編成)。

実験室は図 1 のものを使用。E<sub>1</sub> は一方視鏡の背後に式つて行動を観察したが、グループが示した行動方向数の記録しか出来なかつた。猶この場合、生じた行動はすべて積極行動であつたから、表 I<sub>b</sub> には (積極) 行動方向数のみの変化を掲げることにする。

行動方向数は 4 回目以後有意義に減少する。そして又、子供が集団をなす場合 (尤も互に知り合つた子供の集団の場合であるが) 積極的に動ける素地 (人の力の拡大) が出来ることも注意しておくべきだろう。これは実験 I<sub>b</sub> において、子供の行動が E<sub>2</sub> の存在によつて大きく制約されたことと対比的である。(ここに、社会的馴れ・不馴れが問題になつてくる。)

扱、この辺で、以上の三つの実験の結果から云えそうな事を考えてみよう。それは、空間の馴れの成立の場合

Table I<sub>c</sub>

回数 グループ	積 極 行 動 方 向 数					
	I	II	III	IV	V	VI
Aグループ (三年生)	6	4	4	3	2	2
Bグループ (三年生)	5	5	7	3	1	1
Aグループ (二年生)	7	4	4	3	4	2
Bグループ (二年生)	8	5	3	6	7	5

の一般的型を想定しうる段階に達したと思えるからである。

(1) 空間的馴れ成立の場合は、延行動数が減少し、且つ同時に、行動方向数が減少する。両者の同時的成立は、空間的馴れ成立の、客観的なメルクマールとみなしてよい。

(2) 空間的馴れの成立において延行動数と行動方向数が減少するのは、最初不馴れな空間にあつては、空間全体に向つた一つのモチベーション (探索的とよぶべき) が支配するが、まもなく、かかるモチベーションにもとづく視覚-運動的な対象選択の後、いくつかの比較的固定したモチベーションの分節が生じ、且つこれらモチベーション相互の間に安定した関係が成立するからである (表 I<sub>a</sub> に実験 I<sub>a</sub> の S III, S IV の例をあげて行動方向の固定安定化の経過を示しておく。)

(3) 積極的行動の生起は、それによつて空間的馴れ成立を確定しうるメルクマールとして認められるわけにはいかない。

(4) 初回の延行動数及び方向数の大きさ、及び馴れが成立と共に生ずるそれらの減少の程度には、個性がある。

以上が、実験 I<sub>2</sub>, I<sub>3</sub>, I<sub>c</sub> の結果から我々が設定しようとするテーゼであるが、では、空間の不馴れと情緒的不安定 (たとえば、恐怖) を弁別しうる基準はいくかに求められるのか、又空間的馴れの成立と、空間の構造化の関係はどうであるのか、この二つの重大な問題を解決

Table 1<sub>J</sub>

S IIIの例 (数字は各行動方向に対する行動数を示す)

来訪回数 方 向		I II III IV V VI VII						
		I	II	III	IV	V	VI	VII
ド	ア	3	2					
ベ	ク	2	2		1		1	
戸	棚	2	2		1	1		1
見	廻	1					1	
テ	ー		1					
洗	面		1					
自	己			1		1		
テ	ー						1	
ブ	ル							4

S VIの例

来訪回数 方 向		I II III IV V VI VII						
		I	II	III	IV	V	VI	VII
ド	ア	2	1					
ベ	ク		1					2
戸	棚	1	1	1	1	2		1
見	廻	2					1	
洗	面	1						
自	己	1		1	1	1		
ス	タ	1						
リ	ー							
ン								

しえなければ、以上のテーゼも空証文に等しいであろう。前の問題に対しては §5 において、後の問題に対しては次節において、夫々の解答を見出そう。

4. 空間の馴れと空間の構造化との関係

実験 II<sub>a</sub>. 図 1 に示した実験室を使用。S は神明小学校 3 年児童 8 名 (知能程度上 2, 中 4, 下 2, 計 8 名)。実験の手続は実験 I<sub>a</sub> の場合とほぼ同じだ (但し、実験開始に先だつて小学校の先生に依頼してペグボードの手先の作業を教えておくようなことはしなかつたし、大学の実験室で何をやらせるかもしらせなかつた。従つて、実験の初日には、P による M 作業を教えねばならなかつた) が、それに新に次のような手続をつけ加えた。即ち S の第 3 回目の来訪の際、M 作業が終了して一通りの手続が終つた直後、E<sub>2</sub> は S にむかつて、「ワークブックもつてらつしやい」同じく来訪第 5 回目の終了直後「漫画の本もつてらつしやい」、第 6 回目に「色紙もつてらつしやい」と云つてみて、その時の S の行動の仕方を観察記録することにした。延行動数及び行動方向数の結果は、参考までに、表 II に掲げておく。S VII は実験室の入口で全く萎縮して了つていたので記録にならなかつた。延行動数では、1 回目と、3, 4, 6 の各回との間に有意の差が認められる。この実験においても、先に立てた空間の馴

Table 2

来訪回数	延 行 動 数						行 動 方 向 数					
	I	II	III	IV	V	VI	I	II	III	IV	V	VI
S												
I (♂上)	14	10	6	5	6	8	8	8	5	5	6	7
II (♂上)	16	3	5	8	7	9	9	3	4	4	4	7
III (♂中)	14	15	5	2	8	9	8	9	5	2	7	6
IV (♂中)	14	16	5	10	18	6	10	9	4	6	7	6
V (♀中)	10	6	7	10	9	5	7	6	6	6	5	5
VI (♀中)	16	12	12	7	6	×	9	8	7	6	5	×
VII (♀下)	13	7	7	3	5	10	8	6	5	3	4	5
VIII (♀下)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

れについての第 1 テーゼが妥当するようである。このテーゼからの多少の脱逸は、実験手続に加えられた新たな手続——作業終了後のあの命令——の影響である場合が主であろう。この点に関しては、次節における吟味にまかせる。

扱、命令に対する反応の仕方はどうであろうか。まず第 3 回目終了の際の、「ワークブックもつてらつしやい」に対しては、8 人中 7 人が、なす術を知らず、まじまじと E<sub>2</sub> の顔を見つめるばかりだつた。1 人が探そうとする態度を示した、それは I. Q. の高い者ではなかつた。第 5 回目終了後の「漫画の本もつてらつしやい」に対しては、8 名の中 4 名までが、直ちに戸棚に駆けつけて持ち出して来た (二十冊ばかりの漫画の本の中一冊ずつ持たせた)。まさに、間髪入れざる行動であつた。他の 4 名のもはなすべきすべを知らなかつた……前回のワークブックのことがあるにも拘わらず。しかも、その中には、I. Q. の上クラスのもの有一名あつたのだ。最終回の「色紙もつてらつしやい」に対しては、S の視野内に容易に入りうる位置に色紙がつみ重ねられてあつたに拘わらず直ちに色紙の所に赴いたのは 1 名のみ、他はグルグル探し廻つた末見つけ出した。かくして、ワークブックを認知していた率はともかくとして、\* 漫画の本は  $\frac{4}{8}$ 、色紙は  $\frac{1}{8}$  となり、漫画の本の認知率は色紙のそれに対してはば大きいように思われる (危険率が高くて、はつきりとは云いきれない。なお、ワークブックという言葉の意味を 3 年生全般に授業時間を利用して担任の先生から教えておいて貰うようにしておいた)。

以上の結果から、漫画の本の特殊な性格が目立つが、漫画の本は果して、いつでも認知率が高いであろうか。上と同じような実験を再度行つてみた。

\* 初めての命令であつたので、命令の理解が出来なかつた場合もあらうと思われる。

実験Ⅱ・Sは7名(神明小3年生, 知能程度上2名, 中4名, 下1名)。実験室に招いた回数は1951年11月28日より12月7日にかけて6回。実験室は図1のもの。実験Ⅱ<sub>a</sub>の如く実験をすすめてゆくのだが, 第3回目の際は「漫画の本をもつてらっしゃい」, 第5回目に「色紙持つてらっしゃい」, 最終日に「ワークブックもつてらっしゃい」という風に命令の順番を変えた。

この実験結果の延行動数, 方向数の掲載は省略する。それらが, 命令を手續に加えるようになった回の次の回から, 一般的原則から脱逸する傾向が現れたことは, 実験Ⅱ<sub>a</sub>の場合と同様であつた。命令に対する反応についてみれば, 漫画の本の所在を知っていた者は皆無( $\frac{0}{7}$ )\*, 色紙の所在については4人が知っていたが, I. Q. の高いものが知っていたわけではなかつた( $\frac{4}{7}$ )。ワークブックについては, その所在を知る者は再び皆無( $\frac{0}{7}$ )といつた結果である。

猶, 詳細な記述は略するが, 以上の他に, 実験Ⅱ<sub>b</sub>のような手續に, 上述の命令の手續を加えた実験を, 二系列やつてみたが, この場合は, Sを実験室内に単独に放置せず, E<sub>2</sub>がSの傍を離れずにいるのだから, 漫画や色紙, ワークブックの存在を認知することは益々困難であつた。それでも最終回に求められた色紙については, 7人のSの中4人が素早く反応した場合もあつた(やはりI. Q. とは無関係)。とにかく, 色紙や漫画の本, 就中漫画の本, は認知され易いらしい。漫画の本は, 第5回目の来訪までにはいつの場合でも気付かれている。

以上のことから, 空間の構造化とは, 決して知能のみによつて決せられるものではなく, モティヴェイションを抜きにしては全然考えられない事柄であり, それと表裏一体をなすことが判る。まず, 探索行動としての視覚一運動的な対象選択の後には, その人のモティヴェイションの1項をなさない事物は, その人にとっては存在しないも同然の事物となる。ただその人のモティヴェイションの1項をなす事物だけが存在するようになる。先に私は, 探索的と呼びうる一本のモティヴェイションから幾つかのモティヴェイションが分節し, それ等相互の間に安定した関係が成立することが, 空間的馴れの一つの側面であると述べた。してみれば, このモティヴェイション相互の間の安定した関係(モティヴェイションの構造

\* この命令が初めてのものであつたので或は命令の意味が納得出来なかつたこともあるかもしれない。とにかく, 漫画の本の所在をE<sub>2</sub>が指でさし示してやるまでその所在の所へ行かなかつたことをみれば, 認知率皆無であつたと云つてもいいようだ, 「このお室の中にあるのよ, そうら, あそこにあるわ。」とSに漫画の所在を教えてE<sub>2</sub>は指でささなければならなかつた。

化)は直ちに空間の構造化の直接の表現であり, それと一体をなすものであると云うことが出来る。かくして空間の構造化も, 亦空間の馴れ成立の一つの側面であるとみることが出来る。このように考えを進めてくる時, 最後に, 従来習慣とよばれてきたものの一つが, 実はこのような空間的馴れにあることに気づかれるであろう。

### 5. 空間の馴れの破壊

前節で述べた実験Ⅱ<sub>a</sub>, 及びⅡ<sub>b</sub>において, 我々の提出した第1テーゼの型がくずれる傾向がみられたが, それは, 新条件の附加一命令の附加一によるのだろうと解釈しておいた。其処では, 馴れの崩壊が起りかけたのだと考えられるが, この馴れの崩壊を実験的に検討してみることが反つて, 馴れの性格を愈々明確にする方途でもあろう。

これから述べる諸実験の主たる手續は, 実験Ⅱ<sub>a</sub>のそれと同じだから, それを思い出して貰うことにして, ただ, 破壊を試みるために附加した手續のみを記することにする。使用した実験室はすべて図1のもの。Sは神明小学校の3年用及び2年生。

実験Ⅲ. Sの来訪第6回目に, E<sub>2</sub>がSを実験室に放置する間, E<sub>1</sub>(E<sub>1</sub>はSと親しむ機会を実験の期間前も期間中も持たなかつた)がずつと入室して, Sの行動を見守る態度をとることにした。表Ⅲ<sub>a</sub>は本実験の結果であるが, Sの来訪6回目におけるE<sub>1</sub>の態度は果して如何なる影響をSの行動に及ぼしているだろうか。延行動数及び行動方向数の増減について, 凡そ次の4つの型がみられる。

1) 延行動数が来訪第1回目程度に増加し, 行動方向

Table Ⅲ<sub>a</sub>

来訪回数	延 行 動 数						行 動 方 向 数					
	I	II	III	IV	V	VI	I	II	III	IV	V	VI
S												
I (♂上)	15	13	9	9	9	9	9	7	7	4	3	6
II (♀上)	7	9	4	4	5	7	7	6	3	4	4	5
III (♀中)	14	12	22	19	4	19	7	6	10	4	2	5
IV (♂中)	25	8	11	14	10	22	8	7	6	6	4	4
V (♀中)	32	13	9	11	13	16	11	8	7	4	7	7
VI (♀中)	19	11	12	13	15	11	11	6	8	5	7	3
VII (♀下)	25	7	7	12	4	22	12	5	6	5	4	7
VIII (♀下)	29	12	14	10	7	12	13	8	6	3	4	3

数は第1回目の程度までではないが, 少々増加するもの……S II, III, VII。

2) 延行動数は少々増加するが, 方向数は増加しない

もの……S IV, V, VII。

3) 方向数のみが少々増加するもの……S I。

4) 延行動数も方向数も増加しないもの……S VI。

となつて、一樣な結果は得られていないのである。従つて、馴れた空間を、もとの不馴れなものに逆転させることには余り成功しなかつたのだと云わねばならない(何故なら、あの第1テーズに従えば、延行動数も、方向数も共に来訪第1回目程度に増加した時、はじめて、不馴れな空間になつたと云えるのだから)。もつと何か他のことが生じたらしいのである。上記の結果から強いて一般的共通的なものを抽出すれば、第6回目には延行動数は第1回目のそれを凌駕する程に増加することがあつても、行動方向数は殆んど増加しないか、たとえ増加するとしても第1回のそれには及ばない、ということであろう。つまり、もつと簡略に云えば、充分な行動方向数の増加を伴わない延行動数の増加が生じた、ということになる。この事は何を意味するのだろうか。単に、馴れた空間が、ほんの僅かばかり、不馴れなものになつたということの意味するのだろうか。それとも何か他のことが生じたことを示すのだろうか。そのことについて一つの暗示を与える事実がある。第6回目の実験中に、各Sに共通に現われた特有な現象が一つあつた。それは、S達がE<sub>1</sub>の顔に視線をむけては他にそらし、又むけてはそらすといった視線の振子運動的揺れが生じたことである。勿論、その揺れの速度にはSによつて相異があつて、延行動数の多いものでは揺れが早く、少ないものでは遅かつた。このように、E<sub>1</sub>に集中された(二つの例を表IIIに掲げておく、第6回のE<sub>1</sub>に対する視線の集中程度を推測して欲しい)この視線の揺れは何を意味するのだろうか。

Sによつて強弱の差異はあつたらうが、情緒的に不安定な状態が生じたと仮定するのは間違いであろうか。事実、S達は、「今日はお部屋に男の先生がいて恥ずかしかつた」と実験終了後E<sub>2</sub>に述懐したのだつた。

[S達が来室する度に毎回行わせたM作業の成績は、いずれの実験においても克明に記録された。Sの来訪回数が進行し、作業回数が増加すると、単位時間内の作業量が増加する。従来は練習効果という語をもつてこの現象は説明されてきた。併し、その作業を包む空間の馴れの成立が、かかる練習効果と称せられるものを支えるZ項たることも考えておかねばなるまい。然しともかく、この作業量の増加する経過は、他の幾つかの要因の混在によることを慮つて、これを空間の馴れ成立のメルクマールの一つとして掲げることがさし控えてきた。所で、実験IIIの第6回目の作業——それはやはりE<sub>1</sub>の見守る中

Table III

S IVの例

方 向	来訪回数					
	I	II	III	IV	V	VI
鏡	7	2	1	6	4	
北 側 の 絵	6		1	1		
ペグボード	3	1	2	4	3	3
戸 棚	1	1			1	1
東 側 の 絵	3	1	2	1		
コリントゲーム	2	1		1		
窓	1					
西 側 の 絵	2	1				
自 己		1	4		2	9
入 口			1	1		
E <sub>1</sub>						9

S VIIの例

方 向	来訪回数					
	I	II	III	IV	V	VI
鏡	4	2	2	3	1	6
北 側 の 絵	3		1			
ペグボード	4	1	1	4	2	1
戸 棚	1			1		
東 側 の 絵	5	2	1			1
コリントゲーム	1				1	1
窓	1	1				
西 側 の 絵	2					
自 己	2	1	2	4		1
電 蓄	1					1
シロホン	1					
E <sub>2</sub>						11

(数字は各行動方向に対する行動数を示す)

に行われたのだが——の成績は、第2回目のそれに退行した。この退行は恐らく、情緒的な不安定によるものであつたらう。因に、8人のSの6回にわたる作業量の成績(15秒間における棒さしの量)の毎回の平均値を順次示すと、

19.35 : 20.5 : 20.85 : 21.0 : 22.2 : 20.6

であつて、第5回目と第6回目とでは、5%の危険率で差があると認められた。]

してみれば、情緒不安定は、方向数の増加を伴わない延行動の増加によつて示されると考えてよいのだろうか。又そこに、空間の馴れ・不馴れとの相異を求めてよいのだろうか。なお、次に二つの実験を行つてみた。

実験IV. Sの来訪第3回目の時に、実験III.の第6回目の時と同様に、E<sub>1</sub>がずつとSと共に室内に入つてい

ることとする。結果は表IVに示す。来訪3回目の延行動数及び方向数の増減に関して、次のような型が見られる。

Table IV

数来訪回	延行動数				行動方向数			
	I	II	III	IV	I	II	III	IV
S								
I (♂上)	13	18	11	12	5	8	3	5
II (♀上)	17	13	14	14	9	6	3	7
III (♀中)	17	15	4	15	10	8	3	9
IV (♂中)	15	5	15	6	7	5	6	5
V (♂中)	20	15	43	8	9	7	6	5
VI (♀中)	10	6	27	12	7	4	7	5
VII (♂中)	9	8	35	5	8	6	5	3
VIII (♂下)	11	9	35	8	7	6	5	7

- 1) 方向数の減少が目立つもの……S I, II。
- 2) 延行動数も方向数も減少するもの……S III。
- 3) 延行動数も方向数も増加するもの……S VI。
- 4) 延行動数の増加が目立つもの……S IV, V, VII, VIII。

ここでもやはり、来訪第1回目への復元は認められない。そしてS III.の場合の如きは、実験II<sub>a</sub>のS VII.の場合の如く、極度に萎縮し、緊張したのである。然し、上記の型の中、1)と3)と4)との間に共通なことが一つあった。それは、延行動数の行動方向数に対する比が大になったということである。S III. 以外のすべてのSにおいて、延行動数の方向数に対する比は、第3回目に至つて、多くなっているのである。

所で、この実験の場合も、第3回目には、Sの視線はE<sub>1</sub>を中心として振子運動的に揺れたことを云いそえておかねばならぬ。つまり、具体的に云えば、S達はE<sub>1</sub>をみては他に視線を転ずることをくり返したのだが(延行動数の増加の傾向をもたらず)、視線をE<sub>1</sub>より他に転ずるといつても、「他」の範囲が狭く限られていて、固定的、固執的に一定範囲の方向に眼を転じた(方向数の減少の傾向をきたす)のである(くわしく表に現わすことは省略する。表III, の第6回目を参照していただければよい)。

かくて、以上のことは、情緒不安定のメルクマールとして扱われてもよいであろう。尤も、S III. の場合の如く、極端な緊張(不安)の場合には、行動の一切が萎縮することもあげておかねばならない。

然し、以上二実験の如き、「見知らぬ人」の闯入は、馴れた空間を不馴れなものにするには不適で、それ以上に、それを飛びこえて、強い情緒不安定を生ぜしめるよ

うだ。そこで、もう一つ実験を行つてみた。

実験V. Sの来訪第3回目の時に、Pをとり片づけて算術の問題を印刷した紙をおいておく。結果は表Vに示す。来訪第3回目についてみるに、延行動数、方向数共に初回程度に増加するもの3人(S I, II, IV)。不馴れな空間がこの3人には生じたのだろうか。事実、視線のおもむく方向は、S I, IV. の場合は第1回と同様の範囲に拡大する。S II. の場合は、初回よりも広汎な範囲に拡大した(いずれもくわしい表示は省略する)。方向数は増加しないが、延行動数が増加したものの2名(S VI, VII)。然し、この場合は、あの著しい、固執的な、視線の揺れはおこらなかつた。以上の他のSにおいては、一般的型が生じた。どうやらこの実験においては、著しい情緒の不安定は生じなかつたと云うことが出来る。S I, II, IVでは探索的な行動が現われたのである。それは或いは、ペグボードを探したのかもしれない(テーブルの下側の物入れを覗いていたSもあつた)。もしそうだとすれば、その探索的行動には、はじめの探索的行動に較べ

Table V

来訪回数	延行動数				行動方向数			
	I	II	III	IV	I	II	III	IV
S								
I (♂上)	22	5	18	12	9	4	8	4
II (♂上)	4	7	14	4	3	5	8	4
III (♀中)	23	17	11	8	9	10	5	5
IV (♀中)	20	7	20	13	8	4	7	6
V (♀中)	19	17	14	11	7	7	7	5
VI (♂中)	21	9	16	14	11	6	6	7
VII (♂下)	18	17	25	16	8	7	6	5

て、一つの核があつたことになる。

かくて、以上三つの実験から、情緒不安定→空間の不馴れ→空間の馴れといつた一連の事象を弁別するための客観的メルクマールについて、一応の手がかりを得ることが出来たと我々は主張しよう。くり返し述べておこう、「延行動数の増加の傾向と方向数の減少の傾向の同時的出現、もしくは、延行動数の方向数に対する比の増加は、情緒不安を他の二者に対して特徴づけるものである。尤も情緒的緊張の烈しい時は行動の萎縮を生ずる。」と。

### 6. 残された問題

最後に、馴れ、不馴れの問題についての私の期待と展望を附加しておこう。我々が行動空間の馴れ——不馴れについて得た諸テーゼは同時に社会的馴れ——不馴れの解

明にも妥当な基礎を与えてはくれないだろうか。不馴れな社会が馴れた社会に転ずることは、如何なることを示すだろうか。行動的には恐らく、不馴れた空間が馴れた空間に転ずる場合に似たことが生起するのではなからうか。つまり、我々が既にあきらかにしたテーゼにおいて、行動の対象たる事物を、人間を以て代置すればよいような、そういうテーゼが得られはしないだろうか。或はそれに加うるに更に、新しい特有なテーゼをうる事が出来るだろうか。この辺の吟味は将来の研究にまつこととして、ひとまず筆をおこう。

末筆ながら、本研究に色々御助言下さった松本金寿、梅津八三、続有恒、北村晴朗の諸師、諸先輩に、それから、実験のためにいろいろと便宜をはからつて下さった神明小学校の京藤勝治、藤枝勇三の両氏及び春山小学校の小林利雄氏に厚く御礼申し上げます。又、補助者となつて下さった高山蓉子、安川ゆう、牧野清子の三氏にも心から感謝する次第です。

(1953. 2. 28)

#### 文 献

1. Arsenian, J. M.: Young Children In An Insecure Situation. *J. Abn. Soc. Psychol.*, 1943, 38.
2. Miller, G. A., & Viek, P.: An Analysis Of The Rat's Response To Unfamiliar Aspects Of The Hoarding Situation. *J. Comp. Psychol.*, 1944, 37.
3. 三隅二不二：大いさの恒常現象を中心としてみた原初的知覚空間体制の発達心理学的研究。北九州外国語大学論文集，第一輯。
4. Shirley, M. M.: Children's Adjustments To A Strange Situation. *J. Abn. Soc. Psychol.*, 1942, 10.
5. 梅津八三：先天性盲人の開眼手術後における視覚体験，児童心理と精神衛生 No. 10, 1552.
6. Viek, P., & Miller, G. A.; The Cage As A Factor In Hoarding. *J. Comp. Psychol.*, 1944, 37.